



瑠

璃

窓

(2)

草 樂 生

◇……演劇、映畫に至るまで國民大衆を對照としたものでないと受けない時代であるから演者の苦勞は並大抵のものではない。然も大衆の間に伍した少數の、その道の達眼者の眼は寸分の隙なく鋭く光つてゐるのであるから、苦心は更に大きい。即ち藝に生きむか、衆に阿ねらんか、心二つ身は一つと言ふ奴で、勢ひある種の型を護つて、進みもせず、退きもせぬ技域内を彷徨するのが、最安全！且つ賢明な方法として結論づけられるのも致し方のない事である。斯うした傾向が眞に藝道に精進する者の本然の道でない事は疑を容

れないのであるが、一面觀客の生活は嚴然たる現實に當面させられ、演技に陶醉して、詠嘆之を久しうするには餘りにも事態が森嚴過ぎてゐる事を忘れてはならない。興行の形式が、その内容が、日一日と改新されてゐると同様に演技法も、その目的も時代を反映した、大衆を目標としたものに更められねばならぬ事も亦當然である。

◇……殊に淨瑠璃義大夫節の如き、一度や二度、同じ外題を傾聴した位では事件の筋書すら會得し盡せないと云ふ奥深いものでは、先づ大衆をして熱烈なる歡迎を贏ち得ること、而して後徐

ろに藝の眞髓に觸れしむと言ふ所謂大衆教育を第一義とするものでなくてはならない。理窟を超越した、比較的單純で、卒直で、日常生活に容易にとり入れる事の出来る種題を選んで、大衆の心を把握し、興奮を呼び起し、忠君愛國の思想を昂揚せしめ、死を鴻毛の輕きに比すべきを心から諒得せしむるのが、これからの演技者の時代に處する緊要な態度であると思考するのである。

◇……それには、もつと數多く大衆をして演技に接觸せしむるの方法を講じなければならぬ。例せば、文樂座の如き、古典藝術の殿堂として堅く扉を閉ざし徒らに或る部分の愛好者の愛玩するに委ねることなく、廣く一般大衆の思想善導の修鍊場となし又、男女學生の課外教場でもあるとして、其處に適切な施設なり、方法なりが講じられたならば、何麼に文樂人の社會的貢獻が如實に示さるゝ事であらうか。いま假

に卒業眞近の女學生の一團に文樂座を公開して、先代萩御殿の一幕を觀聽せしめたならば如何な感激、如何な興奮を覺へしめることであらうか。やがて母性として、荒鷲の尊き母として將來を約束づけらるゝ彼女達が一度胸奥に刻み付けられた眞摯な教訓、偉大なる覺悟は、やがては日本女性の一人として、何等かの形によつて示現せらるる時期が到來することを信ずるものである。何巻の修養書を繙くよりも、遙かに適切な實際教訓を目のあたり髣髴せしめ心から感嘗せしむる方法として、斯うした試演を繰返し社會に實現せむことを望むものである。

心とし、批判、吟味に敢闘せらるゝ劇評者、研究者の、その隠れたる功績に對して何等酬ゆるの途なきを遺憾とするものである。

(十八、五、十一)

正誤表

第四百十九號

頁 段 行 誤 正

正誤表

頁	一二	段	行	誤	正
ク	上	ク	一五	谷太夫	若太夫
一四	上	九	竹澤、豊澤	竹澤、鶴澤	
二〇	上	七	中山嵐三郎	中山徳三郎	
ク	ク	一二	紅葉狩	紅葉狩	
二七	ク	一八	須が	彼が	
二九	下	一七	遣つて	遣へて	
ク	ク	二六	(五十六歳、初め	(五十六歳) 勤め	
第四百十八號					
五〇	上	一〇	作法と	作法を	
ク	下	九	事例もある	事例のある	
ク	ク	一八	粗野	粗朴	
五一	上	一一	「私の足は	(削除)	
ク	ク	一六	「……やうに」	(削除)	
五一	下	一九	「そして」	(削除)	
五二	上	七	藝道行業	藝道修行	
ク	下	一	藝道の區分	藝道の鎮成	
ク	下	一	欠如せる人	不充分なる人	
ク	下	一四	次で二名に合は於ての……	(削除)	